

マルタ・アルゲリッチ&ミハイル・プレトニョフ、夢の共演！

ピアノ音楽祭「シンフォニック・ピアノ」

1月16日～21日●ルツェルン・カルチャー・コンGRESセンター、他

取材・文＝中 東生

写真＝Philipp Schmidli, Luzerner Sinfonieorchester

22年間続いたルツェルン音楽祭ピアノ・フェスティバルが2019年にいったん幕を閉じ、その穴を埋めるように生まれたのがルツェルン交響楽団の「シンフォニック・ピアノ」だ。今年はマルタ・アルゲリッチをピアニスト・アソシエに冠し、1月16日に開幕した。その1カ月ほど前にマリア・ジョアン・ピリス(p)が健康上の理由からキャンセルしたが、ミハイル・プレトニョフが代役を担い、アルゲリッチ&プレトニョフの2台ピアノ共演が世界で初めて実現した。

まずはプレトニョフのソロでシューベルト「ソナタ第4番」。ゆっくりした歩調で登場し、居間のピアノに座るような様子ですぐに弾き出す。曲想を引っ張って表現しようという気はないらしく、淡々と、「シューベルトはこうかな？」などとピアノに話しかけるかのような弾きかただ。透明でクリアな、無垢な音の美しさだけが光る。それがショパン「24の前奏曲」では覚醒したように、誇張せずとも最大限のロマンティシズムや運命を表現し、超速でも芸術的な匠の技を聴かせた。

休憩後はアルゲリッチと、まずモーツァルトの「アンダンテと5つの変奏曲」K501でモーツァルト姉弟のように戯れ、シューベルト「幻想曲」D940で本領を発揮した。アンコールも「バッハ」とだけ告げて数曲をつなげたメドレーを弾き、客席を沸かせた。

6日間にわたる開催期間中、ダヴィッド・フレイ(p)やエリーザベト・レオンスカヤ(p)、ダニエル・ペーレ(T) & オリヴァー・シュニーター(p)、ベンジャミン・グロヴナー(p)、15歳のアリエル・ベック(p)、キット・アームストロング(p)が出演し、アルゲリッチも毎日、ジャニーヌ・ヤンセン(vn)とミッシェル・マイスキー(vc)のトリオやジャン＝イヴ・ティボーデ(p)とのデュオで登場した。

20日には、まずルツェルン交響楽団が19



中心物であるマルタ・アルゲリッチ(左)はもちろん、ミハイル・プレトニョフ(右)やキット・アームストロングなど、若手からヴェテランまで豪華アーティストたちの出演にも注目が集まる「シンフォニック・ピアノ」

歳のヨアフ・レヴァノン(p)を迎えてリスト《死の舞踏》をすごい勢いで演奏したあと、当フェスティバルがマルク＝アンドレ・アムランに委嘱した《魔宴》を世界初演した。

第2部はマティアス・ゲルネ(Br)がアレクサンダー・シュマルツのピアノでシ

ューベルト《冬の旅》を歌ったが、ナーヴェスな様子でピアノにへばりつくステージマナーなど、聴いているのが苦痛だった。

しかしアルゲリッチが登場し、J.S.バッハ「パルティータ第2番」を弾くと、爽やかな癒しが訪れる。朱色のパンツスーツでキメた酒井茜と2台ピアノで弾くプロコフィエフ「交響曲第1番《古典》」(寺嶋陸也編曲)



孫息子たちに挟まれてピアノを弾くアルゲリッチ

はスリリングで、この二人ならではと思わせる。最後はセルジオ・ティエンボとラヴェル《ラ・ヴァルス》(2台ピアノ版)で息つく暇も与えず、さらに不穏な時代をも感じさせ、南米人のワイルドさが炸裂した。

アンコールに登場した二人の孫息子に挟まれて弾くアルゲリッチは、ピアノ界の「母なる大地」のようだった。